

2023 年度（令和 5 年度）
高校野球メディカルサポート活動報告

1. メディカルサポートの概要（表 1）

1) 参加大会

下記 4 大会に参加した。

- ・ 第 75 回春季関東地区高等学校野球大会群馬県予選（春季大会）：4 日間 7 試合
- ・ 第 105 回全国高等学校野球選手権記念群馬大会（夏季大会）：13 日間 59 試合
- ・ 第 76 回秋季関東地区高等学校野球大会群馬県予選（秋季大会）：4 日間 7 試合
- ・ 第 68 回全国高等学校軟式野球選手権大会北関東地方大会（軟式北関東大会）：2 日間 3 試合

2) サポート内容

メディカルサポートの実施内容は、試合前の傷害に対するコンディショニングや、試合中の傷害や体調不良等への応急処置、試合後のクーリングダウンであった。試合後のクーリングダウンは、春季大会と秋季大会は準々決勝以降、夏季大会は 1 回戦～3 回戦まで、軟式北関東大会は全試合において、試合後に依頼のあった投手に実施した。なお、夏季大会の準々決勝以降は、登板した投手に対して医師による関節機能検診が行われたため、投手クーリングダウンは実施しなかった。また、本年度より夏季大会における 3 回戦以降の野手クーリングダウンが再開となった（新型コロナウイルス感染症流行時は中止）。

3) 参加スタッフ数

延べ 95 名、実数 55 名であった。

4) 対応選手数

応急処置、投手クーリングダウン合わせて延べ 140 名の対応があった。

5) 応急処置対応件数

延べ 31 名の選手に対し、38 件の対応があった。

表 1 メディカルサポート概要

大会	日数	試合数	参加 PT 数 (実数/延べ数)	対応人数（延べ）			応急処置 対応件数
				応急処置	投手クーリン グダウン	小計	
春季	4	7	8/8	0	16	16	0
夏季	13	59	55/75	27	74	101	31
秋季	4	7	7/8	3	14	17	6
軟式北関東	2	3	4/4	1	5	6	1
計	23	76	95(延べ)	31	109	140	38

2. 応急処置の対応結果

1) 対応内容概要（表 2、3）

延べ 31 名、実数 29 名に対して実施し、対応件数は全 38 件であった。対応内容別件数は全 52 件中、アイシングが 16 件（30.8%）と最も多く、次いでストレッチングが 14 件（26.9%）、テーピングが 8 件（15.4%）であった。

2) 傷害部位別件数（表 4）

傷害部位別件数では、全 38 件中、下腿部が 10 件（26.3%）と最も多く、次いで大腿部 8 件（21.1%）、頭部 5 件（13.2%）、前腕および手部・手指がそれぞれ 4 件（10.5%）であった。

3) 傷害内容別件数（表 5）

傷害内容別件数では、全 38 件中、筋痙攣が 15 件（39.5%）と最も多く、次いで打撲が 5 件（13.2%）、関節構成体損傷が 3 件（7.9%）であった。

表 2 対応人数および対応件数

	春季	夏季	秋季	軟式北関東	計
対応人数（延べ）	0	27	3	1	31
（実数）	0	25	3	1	29
対応件数	0	31	6	1	38

表 3 対応内容別件数

	春季	夏季	秋季	軟式北関東	計
アイシング	0	15	1	0	16
ストレッチング	0	13	1	0	14
テーピング	0	8	0	0	8
傷害・体調確認	0	6	0	1	7
救急搬送	0	1	2	0	3
徒手の対応	0	1	0	0	1
止血処置	0	0	1	0	1
その他	0	1	1	0	2
計	0	45	6	1	52

表 4 傷害部位別件数

	春季	夏季	秋季	軟式北関東	計
頭部	0	2	3	0	5
顔面	0	0	1	0	1
胸腹部	0	1	0	0	1
肩関節	0	1	0	0	1
前腕	0	4	0	0	4
手関節	0	2	0	0	2
手部・手指	0	3	1	0	4
大腿部	0	8	0	0	8
下腿部	0	9	1	0	10
足関節	0	1	0	0	1
その他	0	0	0	1	1
計	0	31	6	1	38

表 5 傷害内容別件数

	春季	夏季	秋季	軟式北関東	計
筋痙攣	0	14	1	0	15
打撲	0	4	1	0	5
関節構成体損傷	0	3	0	0	3
出血	0	1	1	0	2
骨折（疑い）	0	2	0	0	2
脳震盪（疑い）	0	1	1	0	2
筋・腱損傷	0	1	0	0	1
熱中症	0	1	0	0	1
過呼吸	0	0	0	1	1
不明	0	1	0	0	1
その他	0	3	2	0	5
計	0	31	6	1	38

3. 投手クーリングダウンの対応結果

1) 対応投手数（表 6）

投手クーリングダウンは延べ 109 名、実数 76 名に対して実施した。参考として、新型コロナウイルス感染症流行前の直近 3 年間（2017～2019 年度）の平均対応数は延べ 160 名であり、新型コロナウイルス感染症流行以降は、2020 年度が延べ 9 名、2021 年度が延べ 25 名、2022 年度が延べ 76 名であった。

2) 投手クーリングダウン実施者の疼痛状況（表 7）

投球時痛を有していた投手は延べ 9 名（8.3%）、実数 9 名（11.8%）であった。疼痛部位は、肩 3 名、肘 1 名、腰部 1 名、大腿部 1 名、その他 3 名であった。

3) 肩関節及び下肢柔軟性（表 8、9）

Combined Abduction Test（CAT）が陽性であり、肩関節下方の柔軟性が低下していると判断された投手は延べ 56 名（51.4%）、実数 43 名（56.6%）であった。Horizontal Flexion Test（HFT）が陽性であり、肩関節後方の柔軟性が低下していると判断された投手は延べ 64 名（58.7%）、実数 51 名（67.1%）であった。

また、下肢柔軟性に関しては、大腿後面、大腿前面、殿部の筋柔軟性について、いずれも低下している選手が多く認められた。

表 6 投手クーリングダウンの実施人数

	春季	夏季	秋季	軟式北関東	計
延べ	16	74	14	5	109
実数	12	51	9	4	76

※新型コロナウイルス感染症流行前の直近 3 年間（2017～2019 年度）の平均対応数：延べ 160 名

表 7 投球時痛有訴者数および疼痛部位

		春季	夏季	秋季	軟式北関東	計
有訴者数	(延べ)	3	3	3	0	9
	(実数)	3	3	3	0	9
肩痛	(延べ)	0	2	1	0	3
肘痛	(延べ)	0	0	1	0	1
腰部痛	(延べ)	0	0	1	0	1
大腿部痛	(延べ)	0	1	0	0	1
その他	(延べ)	3	0	0	0	3

表 8 肩関節柔軟性低下選手数

		春季	夏季	秋季	軟式北関東	計
CAT 陽性者数	(延べ)	5	45	3	3	56
	(実数)	5	33	2	3	43
HFT 陽性者数	(延べ)	8	46	7	3	64
	(実数)	7	36	6	2	51

表 9 下肢柔軟性低下選手数

		春季	夏季	秋季	軟式北関東	計
SLR	(延べ)	5	57	3	5	70
	(実数)	5	36	3	4	48
HBD	(延べ)	14	66	9	5	94
	(実数)	11	43	7	4	65
股関節内旋	(延べ)	10	70	6	4	90
	(実数)	9	48	5	3	65

6. まとめ及び考察

令和 5 年度の高校野球メディカルサポートは、例年通りの春季、夏季、秋季大会の 3 大会に加えて、軟式北関東大会に参加した。内容としては、主に投手クーリングダウンと応急処置を実施した。令和 2 年（2020 年）頃より流行し始めた新型コロナウイルス感染症が令和 5 年 5 月 8 日より 5 類感染症に位置付けられたことにより、夏季大会以降はコロナ禍前とほぼ同様のサポート体制となり、夏季大会では 3 回戦以降の野手クーリングダウンが再開となった（新型コロナウイルス感染症流行時は中止となっていた）。

応急処置の対応件数は例年と類似した結果となり、筋痙攣の対応が最多となったが、比率としては例年より少なく全体の 39.5%であった（例年 50%超）。その他、頭部の傷害や救急搬送されるケースもあり、医師や看護師が同伴しているとはいえ、我々理学療法士もファーストエイド等の知識や技術に関して日々研鑽していく必要性が再確認できた。

投手クーリングダウンの対応件数は昨年に引き続き増加傾向となったが、コロナ禍前と比較すると少なかった。この要因としては、2020 年度より実施している投手の関節機能検診を優先しているためと考えられる。今後も複数投手による継投が多くなることが予想され、対応数が増加しても質の高いサポートを提供できるようにしていきたい。

今後も、日本高校野球連盟や、他都道府県連盟での取り組みも参考にしながら、群馬県高等学校野球連盟とより一層連携を深め、協同してよりよいサポートを提供できるよう取り組んでいきたい。